

## 【解説】

## 岩間暁子教授のマイノリティ研究

## Research on Minorities by Professor IWAMA Akiko

木村護郎クリストフ<sup>†</sup>, ユ・ヒョジョン<sup>††</sup>

本誌には、岩間教授の2本の論文と、その研究成果に基づく報告を掲載している。本稿では、それらの論文の執筆の背景、経緯について述べる。

もともと計量的アプローチを使った社会階層や家族に関する研究を行ってきた岩間暁子教授は、前任校の和光大学でマイノリティ研究の重要性を認識し、2003年に、同僚であったユと共に同大学総合文化研究所の共同研究としてマイノリティ研究会を立ちあげ、その代表を務めた。同大学で非常勤講師をしていた木村もその共同研究に加わった。和光学園の他、日本私立学校振興・共済事業団の研究助成を受けた4年間の研究の成果は、岩間暁子／ユ・ヒョジョン編著『マイノリティとは何か—概念と政策の比較社会学—』（ミネルヴァ書房2007年）に結実した。

その後、岩間教授は、2014年に横浜で開催された第18回世界社会学大会 (XVIII International Sociological Association World Congress of Sociology) で、共同研究で浮かびあがったヨーロッパ、アメリカ、東アジアのマイノリティ概念の異同を比較した報告をユと共に行った。その際、英語圏の出版社から、英語での学術書出版を提案されたのを機に、前著の内容を発展させた英語での著書を企画し、「ポスト多文化主義時代におけるマイノリティと移民の包摂に関する国際比較研究」という研究課題で科研費をとって研究を進めた。ところが、英語著書の原稿がほぼ完成した頃から体調を崩し、亡くなられた。

本誌では、それぞれ同書の章として執筆された2本の原稿を、単独の論文として最低限の編集を加えて掲載している。英語書籍は、他地域に関する章および全体的な比較検討を加えて、今後刊行予定であるが、これらの2本は、岩間教授のマイノリティ研究の骨格といえるものであり、その成果を日本語の読めない研究者や関心をもつ人々にも先行的に提供することは意義が大きいと考える。

上記のマイノリティ研究会の出発点となった問題意識は、日本においてマイノリティ概念がきわめてあいまいに使われている傾向への疑問であった。そこで、共同研究では、他国・他言語でマイノリティがどのように理解されているか、またどのような政策が行われているか、フランス、ドイツ、アメリカ、ロシア・ソ連、韓国、中国等の比較を行なった。そのなかで岩間教授が担当したのが、アメリカと日本であった。本誌所収の2本の論文は、両国におけるマイノリティ概念と政策を丹念に検証している。

<sup>†</sup> 上智大学外国語学部教授 g-kimura@sophia.ac.jp

<sup>††</sup> 元・和光大学現代人間学部教授 h-yu@wako.ac.jp

## 2 岩間暁子教授のマイノリティ研究

米日どちらも、マイノリティ概念の国際比較のなかでは、「少数民族」を核とする限定的な理解とは対照的な「拡散型」に属する。ただし、両者には大きな違いもある。アメリカでは、マイノリティ概念が、社会的承認や権利獲得を求めるための戦略として用いられ、アファーマティブ・アクションなどの具体的な施策とも結びついてきた。それに対して日本では、アメリカ型の拡散的なマイノリティ理解が、その社会的背景や政策的含意を参照することなく無批判に導入され、マイノリティのイメージが無限定に拡散してその意味が薄まるという結果をもたらした。

比較研究に基づくこのような見解を簡潔にまとめたものが、「日本におけるマイノリティの権利保護上の問題に関する報告」である。これは、マイノリティ問題に関する国連特別報告者(UN Special Rapporteur on Minority Issues)が国際的なマイノリティ保護体制を発展させるために各国の識者に情報提供を呼びかけた問いかけに応じて作成したものである。提出したものは英語版であるが、ここでは、問題意識を日本国内に向けて提起するために、日本語原文を掲載している。

岩間教授にとって、マイノリティ問題への取り組みは、単に理論的な関心ではなかった。前掲書『マイノリティとは何か』のあとがきで、岩間教授は、勤務先で起こった実例をもとに、次のように書いている。

自分の問題としてふりかかったときにどのように考え行動するのかにこそ、「マイノリティの視点に立つ」「弱者に寄り添う」といった姿勢が問われる。(435頁)

本誌所収の原稿は、まさにこのような姿勢を問うものとして読まれるべきだろう。しばしば深く考えることなく「ダイバーシティ」(多様性)が称揚される現在の状況のもと、マイノリティの尊重に関する岩間教授の問題意識が本誌をとおしてより広く共有されることを願っている。